令和５年度　研究計画の概要

白井市立白井第一小学校

１　研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導の在り方

～自ら考え，表現する授業展開を通して～

２　主題設定の理由

（１）学習指導要領から

（ア）学習指導要領の総則から

第１節　小学校教育の基本と教育課程の役割

２　学校の教育活動を進めるに当たっては，各学校において，第３の１に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して，創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で，次に掲げる事項の実現を図り，児童に生きる力を育むことを目指すものとする。とある。

> （１）基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力、表現力等を育むとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際，児童の発達の段階を考慮して，児童の言語活動など，学習の基盤をつくる活動を充実するとともに，家庭との連携を図りながら，児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。

上記の実現を図り，算数科の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すかを明確にしながら，教育活動の充実を図るものとする。その際，児童の発達の段階や特性を踏まえつつ，知識及び技能を習得したうえで，思考力，判断力，表現力等を育成し，学びに向かう力，人間性を涵養することが偏りなく実現できるようにしていけるような指導が必要と考える。

第３節　教育課程の実施と学習評価

１　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については，以下の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。

①　学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

②　子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

③　習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

子ども自身が興味をもって積極的に取り組むとともに，学習活動を自ら振り返り意味付けたり，身に付けた資質・能力を自覚したり，共有したりすることが重要である。

また，身に付けた知識や技能を定着させるとともに，物事の多面的で深い理解に至るためには，多様な表現を通じて，教職員と子どもや，子ども同士が対話し，それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

さらに，子どもたちが，各教科等の学びの過程の中で，身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて，資質・能力がさらに伸ばされたり，新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はこの中で，教える場面と，子どもたちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められている。

（イ）算数科の目標から

数学的な見方・考え方を働かせ，数学的活動を通して，数学的に考える資質・能力を次の通り育成することを目指す。

（１）　数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに，日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。

（２）　日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力，基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見いだし統合的・発展的に考察する力，数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。

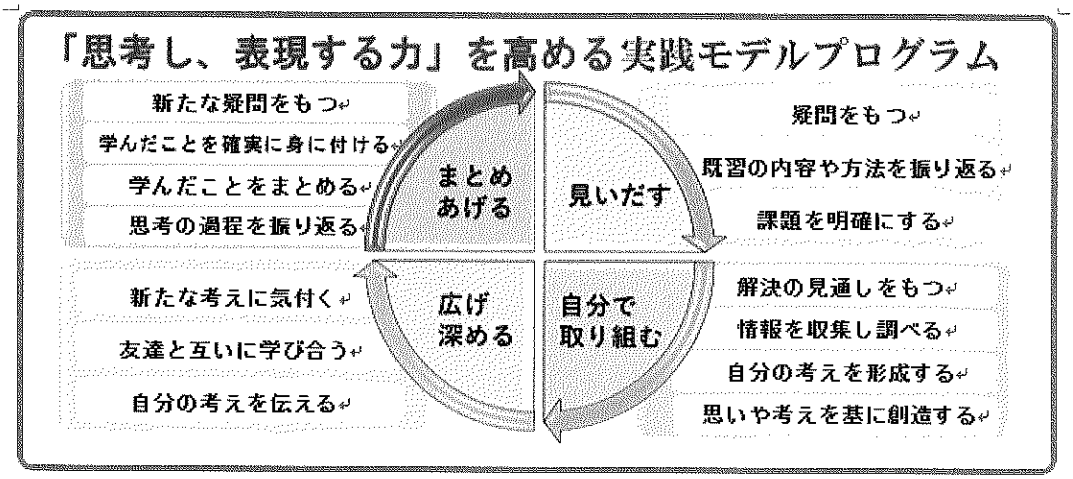
（３）　数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き，学習を振り返ってよりよく問題解決をしようとする態度，算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養う。

新学習指導要領の目標で，幼児期に育まれた数量・図形への関心・感覚等の基礎の上に，小・中・高等学校教育を通じて育成を目指す資質・能力を，「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に沿って明確化し，各学校段階を通じて，実社会との関わりを意識した数学的活動の充実等を図っていくことが求められている。

（２）千葉県の小学校教育過程の展開から

「『思考し，表現する力』」を高める実践モデルプログラム」の活用

「『思考し，表現する力』を高める実践モデルプログラム」（以下　実践モデルプログラム）は，「物事を筋道立てて考える思考力」「自分の考えを書いたり，発表したりする表現力」の育成を目指すための授業づくりを支援するものとして作成された。令和元年度には，「主体的・対話的で深い学び」の視点に加え，新しい実践プログラムとして改訂された。



授業を実践する前に，資質・能力を身に付けた児童の具体的な姿を描き，本時（本単元）の目標を明確にもち，必要となる学びについて考え，実践プログラムから児童の学習活動例を選び出し，「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」を意図的・計画的に位置付けていく。

本校の算数科研究においても実践モデルプログラムを授業展開に取り入れ，児童の思考力や表現力の向上を目指していく。

（３）白井市学校教育「なしビジョン」から

1　持続可能な社会の創り手

2　確かな学力

（1）　子どもの内面にスポットをあて，

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

（2）　ＩＣＴ活用方法の積極的な開発

3　豊かな心

（3）　「やる気」を引き出す生徒指導の推進

（4）　豊かな人間関係を育む学級づくり

4　健やかな体

（5）　「活力」を高める体育活動の創造

（6）　自他の命を尊ぶ健康・安全教育の推進

（7）　全校体制による特別支援教育の推進

白井市学校教育「なしビジョン」がコンセプトとして掲げている「持続可能な社会の創り手」とは，学習指導要領総則の改訂の経緯において，その多様性を原動力とし，質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されるとある。子どもたちが予測困難な時代を生きていくためには，小学校において確かな学力を育んでいかなければならない。「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを通して，それを実現していくことが必要である。

（３）学校教育目標と本校の児童の実態から

１　学校教育目標

ふるさと白井を担う，心豊かで確かな学力を身につけた，たくましい子どもの育成

〈めざす児童像〉
- 自らを伸ばそうとする子
- よく考えともに学ぶ子
- やさしく思いやりのある子
- 健康でたくましい子

〈めざす学校像〉
- 明るく楽しい学校
- 安全できれいな学校
- 地域とともに歩む学校

〈めざす教師像〉
- 質の高い授業を追求する教師
- 子どもの良さをほめる教師
- 組織で対応する教師

２　経営方針

本校の歴史と伝統を大切にし、児童・保護者・地域から信頼される教育活動の展開

３　本年度の経営の重点

①　学習指導の改善
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現
- ICT 活用の推進（協働学習）
- 評価を改善に繋げる工夫
- 読書活動の推進
- 家庭学習の習慣化
- 特別支援教育の充実

本校では，学習指導要領や千葉県の教育課程の展開，白井市学校教育なしビジョン」を受けて左記のように学習指導の改善を学校教育目標に掲げている。

白井市ふり返りナビゲーション（Ｒｅナビ）や全国学力学習状況調査の結果から，本校の児童は読んで理解する力と表現する力に大きな課題があることが分かる。そんな児童の実態を鑑みると，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すにあたり，自ら考え，表現する活動に焦点をあてた教育活動の工夫を研究していく必要がある。

以上（１）～（４）踏まえて，研究主題を設定した。

２　研究仮説と内容

【仮説１】
　導入や自力解決において，単元の内容や児童の実態に応じた活動の工夫を行えば，児童一人一人が主体的に学び，学びを深めることができるだろう。

（１）１単位時間の流れを見通した導入の工夫
（２）自力解決の場の設定と，思考し表現するためのツールの工夫

【仮説２】
　それぞれの考えを出し合いながら，協働して課題解決する場を設定すれば，児童一人一人が主体的に学び，学びを深めることができるだろう。

（１）児童の実態に応じた授業展開の工夫
　　・ペア　・グループ　・全体　　形成的評価を用いた柔軟な指導・支援の実施
（２）児童同士の対話における学校独自のルールの形成

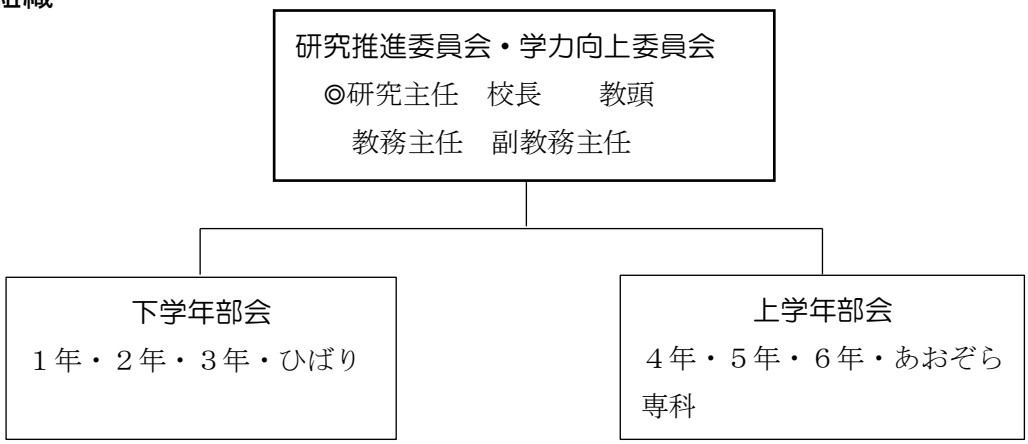
３　「深い学び」の本校の捉え方

　教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官　笠井健一氏によると，深い学びとは，「本質を見極めたり，よりよい方法を選べたりすることだけでなく，日々学んでいく中で少しでも，『あ，そうか』『こういうことなのか』と分かることが深い学び」という趣旨の発言をしている。また，ある授業研究会の協議会において，「０が１になる，１が２になる，ＡとＢの２つの方法からよりよいものを選択できるようになるなど，一人一人に深い学びがある。」とも発言している。

　また，栃木県総合教育センター発行の「『主体的・対話的で深い学び』に関する調査研究」（H30.3）によると，深い学びが下図のように示されている。

新たなものを創り上げる	「今まで勉強したことから、こんな方法でやってみよう。」 「新しい方法を見つけたぞ。」
自分の考えを形成する	「学習してきた○○と○○の理由から、自分は○○のように考える。」
知識・技能を概念化する	「この勉強は、全体の中のこの位置づけなんだ。」 「この勉強は、こういう意味でやる必要があるんだ。」
自分の思いや考えと結びつける	「○○なんだ。自分だったらこうするな。」 「○○がわかった。これは利用できるぞ。」
知識・技能を活用する	「ＡとＢとは、こういう関係があるんだ。」 「前は○○だったので、今日はこうしてみよう。」 「この方法でやってみよう。」
知識・技能を習得する	「この時は、このやり方でいいのだな。」 「○○がわかった。」「○○ができた。」
思考して問い続ける	「どうすればうまくいくのかな。」 「もっといい方法はないかな。」 「これで、本当にいいのかな。」

より高次

本校では深い学びについて，ある一定の基準を越えなければならないものではなく，児童の実態に応じてそれぞれに深い学びがあると捉えることとする。児童一人一人が授業の始まりと終わりの自らの思考・判断・表現や知識及び技能を比較したとき，どのような変容があったかを捉えることが重要である。指導者は児童一人一人の１単位時間や単元における変容を見とり，学びの深まりを評価していくことが求められる。

４　研究組織